



明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析：『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 友子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002891

明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析

— 『婦人世界』 から読み解く黒髪の変遷 —

横山友子

I. はじめに

明治後期から昭和初期にかけて、日本は近代化を達成し、帝国主義的な国民国家としてその歩みを進めていった。その過程において社会の仕組みも社会における男女のジェンダー役割も、大きく変化していった。女性のジェンダー役割と密接に結びついている髪型も、その例外ではない。本稿は、明治末期から昭和初期にかけての日本女性の髪型がどのように変遷し、その背後にいかなる審美観、労働観、ジェンダー役割の変化があったのか、また洗髪や調髪に関わるいかなる技術的变化があったのかを、女性の髪型について言及した雑誌記事の分析から明らかにする。

日本において平安時代以降、女性の黒髪は女性美の象徴として、また妖艶な魅力の源泉として、詠い描かれてきた（高階 2015）。明治期に入ると、女性美の象徴としての黒髪の価値は維持される一方で、その不衛生さと健康に及ぼす影響が問題視されるようになる。なぜなら日本髪には松脂と胡麻油の蝋に香料を混ぜた鬢付け油が使用され（鈴木 2010）、髪を洗う時には、鬢を固めていた多量の油や付着した汚れを取り去るのに半日かかり（平松 2012）、頻繁に洗髪することが困難であったからである。

明治中期以降、医学的な清潔感が確立すると、日本女性の髪型や洗髪方法に対しても、さまざまな啓蒙が行われるようになった。筆者は「私立大日本婦人衛生会」によって発行された機関誌『婦人衛生雑誌』の記事を検討することにより、明治中期から大正中期にかけて、頭髪の清潔についてどのような政策がとられているのかを明らかにした（横山 2016）。そこでは、日本髪から簡素な束髪へという女性の髪型の変遷が、清潔で強健な身体をもつ産む性として女性を位置づける日本の富国強兵政策と密接に関連していること、それにもかかわらず、女性は男性から評価され、日本

の伝統を担う美しい黒髪をもつ美的対象としても位置づけられ、両立の困難な規範の内面化を強いられていることが明らかになった。

しかしながら、『婦人衛生雑誌』は、女性の識字率が低い時代に発刊されていた雑誌である。初期の読者は上流階級の女性を中心となり、後期は看護婦など医療専門者が中心となっていた。そのため、大衆へ与えた影響や変遷を掴んでいるとは言い切れない。また大正期から昭和初期にかけて、女性の社会的地位が大きく変化した時期についても、カバーしきれていない。

この時代の女性の髪型の変遷については、飯島（1986）や平松（2012）によって、当時の社会背景と関連付けた研究がなされている。飯島によって、黒髪を美しいとする美意識が支配的であった伝統的な価値観から西洋文化が導入されて髪型が変化していったことが研究されている。平松は髪の長さや結髪などが文化史的にもつ意味をあきらかにするとともに、美意識はその社会性に裏打ちされてきたことを示した。だがこれらの研究では、当時どのような形で女性の髪型が語られていたのかについては、十分な論証がなされていない。

この当時は、就学率の上昇、識字率の向上を背景に、明治後期以降に急速に普及した活字メディアにおいて、上流階級を対象としたものだけでなく、より大衆的な婦人雑誌が次々と創刊された。婦人雑誌は当時の女性の新たなジェンダー規範を刷り込むイデオロギー装置として、とても大きな役割を果たした（木村 2010）。その中でも、婦人雑誌の原型ともなったといわれる雑誌『婦人世界』は明治後期から昭和初期までの約 30 年間にわたり発刊された雑誌であり、時代とともに変化する情報提供の機能をみることができる。本稿では『婦人世界』を通じて、マスメディアが合意を形成するものという視点から、明治末期から昭和初期までの女性の髪型の変遷を時代背景と記事内容の変遷から検討したい。

第 2 章では、『婦人世界』がいかなる雑誌であったのかを示したうえで、記事分析の方法について述べる。第 3 章では、『婦人世界』が発刊されていた時期を 3 期に区切ったうえで、それぞれの時期に、女性の髪に関していかなる記事が書かれ、そこから何が読み取れるのかを示す。第 4 章では結論として、この時期に女性の社会的地位の変化に伴い、日本髪から洋髪

への大きな変化が認められるが、日本髪はすたれたのではなく、ハレの日の髪型、あるいは労働をしない上流階級女性の髪型として、日本の伝統的美を象徴するものと位置づけられるようになったこと、他方で洋髪は社会に進出した女性に普及し、単に髪質や髪型に対する審美観だけでなく、女性の髪にかかわる身体感覚も変化させていったことを確認する。

Ⅱ. 婦人世界の分析

『婦人世界』は婦人向けの総合雑誌として、1906（明治39）年1月に創刊された。月刊誌として発行され、1933（昭和8）年5月まで全354冊が刊行された。出版後、まもなくそれまでの代表的な婦人雑誌『女学世界』をぬいて、「婦人雑誌といえば『婦人世界』と同義語といわれるほど、売り上げた。当時、売れたといっても、7、8千部から1万部の時代に、『婦人世界』は30万部の発行部数をほこっていた」（山崎 1959）という。このことから、『婦人世界』は当時の中産階級の広い範囲に対して影響を与えたと考えられる。また、その後の婦人雑誌の原型ともなったといわれており、附録をつけるなど、斬新な商法で売り上げを伸ばした。記事の内容は、実用的な生活の知識の提供であり、一貫して家庭の主婦を中心に、若い女性達を対象とするものであった。しかしピーク時に60万部を売り上げるも、昭和期にはいると、『婦人世界』は『主婦之友』『婦女界』といった雑誌に購読雑誌の上位を奪われる。そしてより中下層の人々の人々を含めた生活の現実に寄り添う『主婦之友』（1917〈大正6〉年発行）と読者獲得のための附録合戦や賞金競争の応酬による激しい販売競争を繰り広げるなか、読者の支持は後退し、廃刊へ至るのである。『婦人世界』はこのように1933（昭和8）年には廃刊するものの、明治から大正・昭和と28年の長期にわたる雑誌として当時期の代表的な婦人雑誌の一つであり、中流階級文化のひとつであり続けた。『婦人世界』の記事からは、明治期から昭和初期にわたって時代と共に変化する情報提供のあり方を通史的にみることができるのである。

1. 記事分析方法

分析対象は、第1巻から第28巻（1906〈明治39〉年～1933〈昭和8〉年）における頭髪に関する記事である。研究方法は以下の手順に従った。

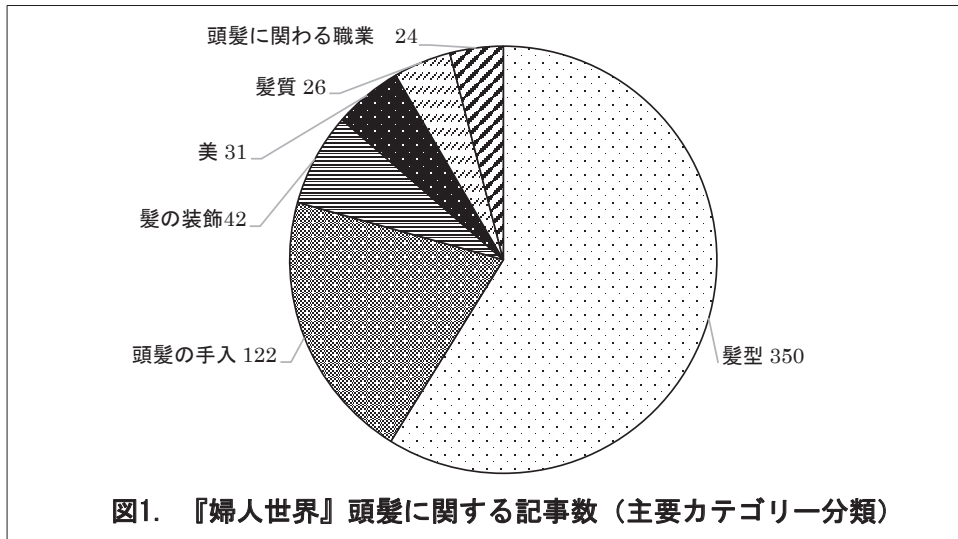
- 1) 婦人世界に掲載されている頭髪に関する記事を雑誌本文の文章より全て抽出した。ただし、雑誌の情報提供の機能をみたいため、読者から寄せられた質問、質問に対する回答は除外した。
- 2) 抽出した記事を「髪型」、「頭髪の手入」、「髪装飾」、「美」、「髪質」、「頭髪に関わる職業」にカテゴリー分類した。
- 3) 分類した記事から、『婦人世界』の執筆者や読者が女性の髪をどのようなものとみなし、それがどのように変化していったのか、その背景を探った。

なお本稿ではこれらの記事を、第1期を1906（明治39）年から1915（大正4）年、第2期を1916（大正5）年から1925（大正14）年、第3期を1926（大正15）年から1933（昭和8）年の3期に分けて分析している。髪型の変遷に関して、どのような時代区分を用いるのかについては、その変化の背景となる社会的な出来事と、分析の対象とする雑誌の継続期間および記事数の両方を考慮に入れる必要があるだろう。上記の区切りにしたのは、雑誌の記事数からいえば、この区切りによって各時期に分析に耐えうる数の記事を配置できるためである。また社会的な出来事に関しては、社会・経済状況に大きな変化をもたらした第一次世界大戦が1914（大正3）年から1918（大正7）年、関東大震災が1923（大正12）年、また大正デモクラシーの全盛期が1910年代から1920年代にかけてであり、女性の髪型に大きな影響を及ぼすような社会変化が第2期に集中する形となり、女性の髪についての記事内容の変化をより明確に提示できると考えたからである。

Ⅲ. 『婦人世界』からみる女性の黒髪に対する変遷

1. 『婦人世界』に掲載された黒髪に関する記事の概要

頭髪に関する記事は、28年間で481本掲載されている。数量的に整理するにあたって、大カテゴリーとして「髪型」「頭髪の手入」「髪の変飾」「美」「髪質」「頭髪に関わる職業」の6つに分類し、各カテゴリーの記事数を図1に円グラフ化した。そのうち、「髪型」「頭髪の手入」「髪の変飾」「髪質」「頭髪に関わる職業」については、それぞれに小カテゴリーを設けた。

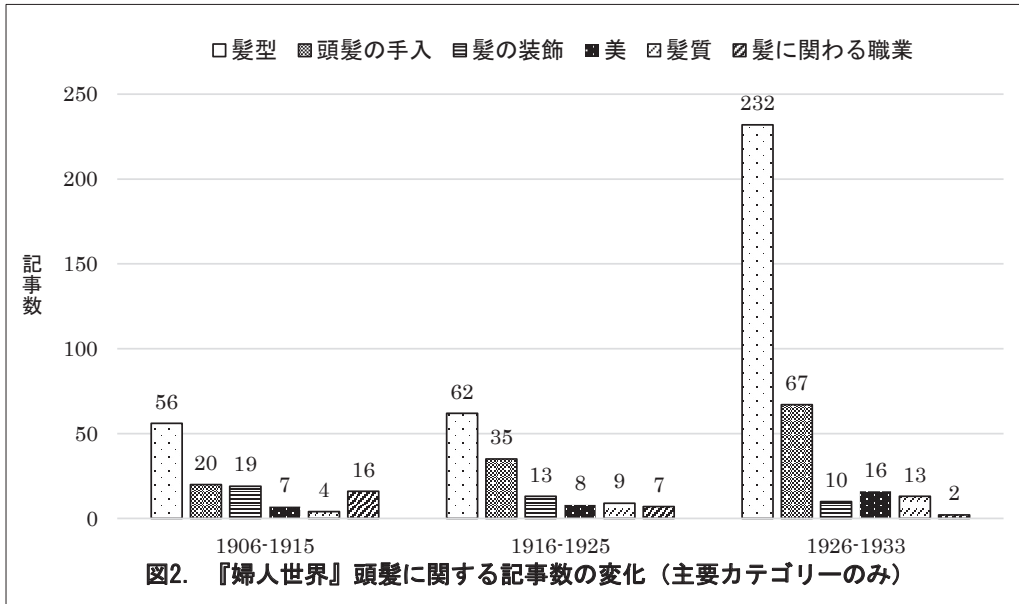


「髪型」については、「日本髪（主に丸髷、島田）」「束髪」「廂髪」「洋髪」「ウェーブ」「断髪」に分けた。「頭髪の手入」については、「洗髪」「整髪」「アルコール拭き」「枝毛切」「髪油」に分け、「洗髪」においては、さらに「洗髪をする間隔」と「洗髪剤」について分け、「洗髪剤」は「布海苔」「うどん粉（小麦粉）」「石鹼」「鶏卵」「椿油の粕」「洗粉」「シャンプー」に分けた。「髪の変飾」については「簪」「櫛」「りぼん」「ヘアピン」「鬘」「造花」。「髪質」については「直毛」「縮れ毛」「長さ」「髪色」。「頭髪に関わる職業」については「女結髪」「美容術師」「美髪師」に分けた。

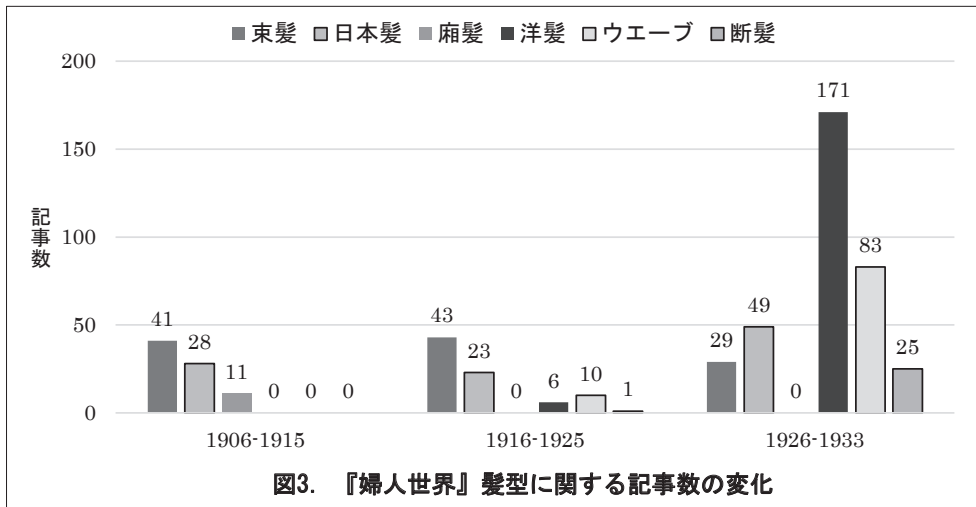
一つの記事に、複数のテーマが存在することもあるため、記事数とカテゴリーごとに分類したテーマ数は同数ではない。

『婦人世界』の誌面に掲載された頭髪に関する記事は実に多様であり、刊行当初より年を経るにつれて、増加し続けた。6つの大カテゴリーを、創刊時1906（明治39）年から1933（昭和8）年までを10年ごとに分け、数量的変化をグラフ化したものが図2である。第1期（1906〈明治39〉年から1915〈大正4〉年）までは、頭髪に関する記事数は77であったが、第3期（1926〈大正15〉年から1933〈昭和8〉年）には299に増えている。刊行当初は、一冊あたり200ページほどの雑誌であったが、徐々に記事数も増え、1926（大正15）年頃には600ページを超える月も少なくなかった。大正期の婦人雑誌は、読者が生活において活用できる実用的情報を大量に提供したことが、ページ数増加の大きな要因である（木村 2010）。

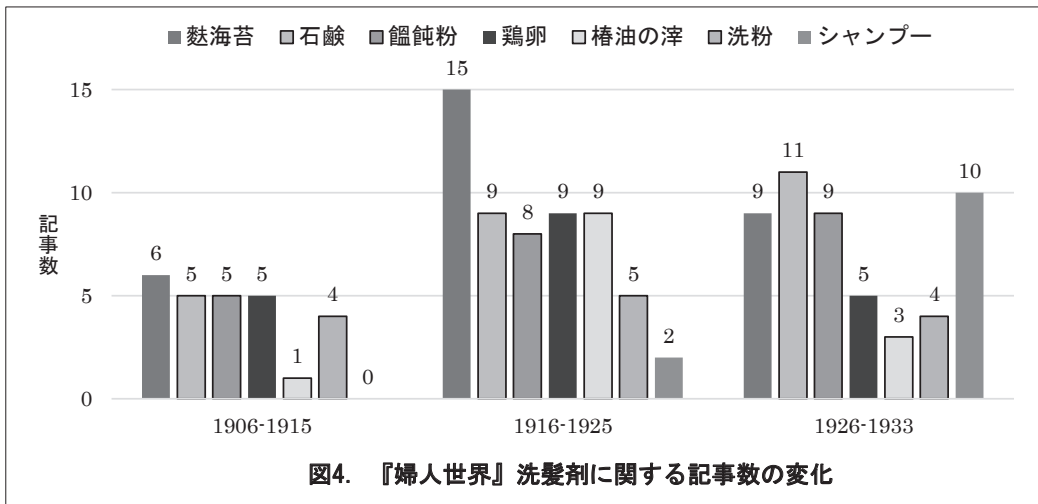
大カテゴリーでいえば、「髪型」が最も多く、「髪型」に関する記事は年々増加していき、特に後半はほかの記事を抜いて3倍以上の差があった。



「髪型」を小カテゴリー化し、数量的変化を図3にグラフ化した。刊行当初は、「髪型」に関する記事の中で「束髪」に関する記事が最も多く、次いで「日本髪」、「廂髪」に関する記事のみであった。第2期（1916〈大正5〉年から1925〈大正14〉年）には、「洋髪」、「ウェーブ」、「断髪」に関する記事が出るようになり、「廂髪」に関する記事はなくなった。第3期（1926〈大正15〉年から1933〈昭和8〉年）になると、「洋髪」に関する記事が最も多い記事になり、次いで「ウェーブ」、「日本髪」、「束髪」、「断髪」であり、髪に関する記事全体の中でも髪型に関する記事はより増加し、その中でも洋髪に関する記事は急激に増加していった。



「洗髪」に関する記事の小カテゴリー化したものを数量的変化し、図4にグラフ化した。どの年代も「麩海苔」を推奨した記事が多く、「麩海苔」に混ぜて使用していた「餛飩粉」も同様に多くみられる。「麩海苔」、「餛飩粉」は、全期にわたって取り上げられており、中産階級にとっては一般的な洗料であったことがうかがえる。刊行当初、全く登場しなかった「シャンプー」に関して、第2期（1916〈大正5〉年から1925〈大正14〉年）の間に上流階級の婦人によって輸入されるようになり、第3期（1926〈大正15〉年から1933〈昭和8〉年）には、「麩海苔」よりも多く取り上げられるようになった。



頭髪に関する記事の書き手は女髪結、美髪師など髪を扱う職業もしくは、髪結や美髪師を育成する学校の教員がほとんどを占めている。それらの記事は、流行の髪型、推奨される髪を保つ手入れの方法などが挙げられており、後半になると、自分で洋髪を結う方法や、ウェーブやパーマの饅の当て方などの実用記事が目立つようになる。

これらのデータをもとに、女性の頭髪に関する記事がどのように掲示されていたのか、その内容は時代によってどのように変化していったのかを、記述された記事を数量化し、具体的に背景を含めて述べていきたい。1906（明治39）年から1915（大正4）年の第1期の特徴は、記事が最も少なく、女髪結に関する記事が多い。1916（大正5）年から1925（大正14）年の第2期は、日本髪から洋髪への変換期であり、第1期に見られなかった洋髪が登場し始め、かつモダンを特徴とする。1926（大正15）年から1933（昭和8）年の第3期の特徴は、経済成長とともに洋髪が受け入れられ、日常生活が大きく変化していったことがみられる。以上の時期ごとに、分析を行っていきたい。

2. 第1期 明治後期から大正初期—伝統にとらわれた頭髪の推奨（1906〈明治39〉年から1915〈大正4〉年）

明治維新後、日本政府は近代化のために西洋諸国の文化を積極的に取り入れようと力を入れた。鹿鳴館開館などの西洋文化を模した上流階級の洋

装化の影響もあり、1885（明治 18）年、医師の渡辺鼎と経済記者の石川暎作が「婦人束髮会」を発足し、従来の日本髪が不衛生、不経済、不便であることを指摘し、大きな害があるとした。そしてそれに代わり、衛生、経済、便益の三つを兼ね備えた束髮を提唱した（平松 2012）。従来の日本髪に比べて軽快で、動きやすく、着物にも洋服にも似合う三つ編みを使ったアップスタイルを提案したのだった（大原 1988）。婦人束髮会が設立され、束髮啓蒙活動を行い、東京女子師範学校の教員や女子生徒が束髮を採用した。次第に髷を廃止し、束髮を広めようとする運動が全国に広まり、女学校を中心に束髮が広まっていった（平松 2012）。

しかし長い日本髪の風習から、一足飛びに西欧スタイルに切り替えることは不可能であった（橋本 1998）。また、鹿鳴館の舞踏会や夜会に出るような洋装をおこなう上流階級の婦人や学生など一部をのぞき、髷を結うための長い黒髪は封建時代を通じて女の美しさを象徴するものとされた（岡 1981）。黒髪による日本髪の価値観は大きな変化をもたらすことなく、根強く残った。

この期間の『婦人世界』における頭髪関連の記事は 77 本である。テーマは、「髪型」についての記事が 56 本、「頭髪の手入」が 20 本、「髪装飾」が 19 本、「美」が 7 本、髪質が 4 本、頭髪に関わる職業が 16 本であった。執筆者は女髪結が最も多い。記事の内容は髪型に関する記事が最も多く、次いで、いかに長く黒髪を保つよう頭髪を手入れするか、という記事であった。

次にテーマごとに、その内容をみていく。「髪型」については、1907（明治 40）年に、「近来は束髮が流行している」¹と束髮の流行と衛生面での推奨をしているが、「油も付けずに束ねて置く、それだから自然と髪が縮れて赤くなる」²と日本婦人に求められる黒髪に束髮は良くないと書かれている。また、1910（明治 43）年の記事では、「島田髷が処女の生命なら、丸髷は人妻の、わけてもうら若くして人妻となりし身のプラウド」³といかに日本髪に結うことが重要かを説いている。加えて、1911（明治 44）

¹ 『婦人世界』第 2 巻第 5 号 1907（明治 40）年 p.110

² 『婦人世界』第 2 巻第 5 号 1907（明治 40）年 p.110

³ 『婦人世界』第 6 巻第 5 号 1911（明治 44）年 p.120

年に出された記事では、「日本人としては、やはり日本髪の方が優美」⁴と婦人の髪型は日本髪のほうがよいと推奨している。明治期の日本髪は、江戸末期と比較し、前髪も鬢も櫛を使って大きく膨らませ、華やかな雰囲気があった（大原 1988）。当時、衛生的、経済的との理由により、束髪が推奨されていたが、「束髪は日本髪風に種種し、廂髪と称した舊來の前髪に十倍した大きなものを突出すやうになりました。最初の束髪は美観といふ點を無視して、實用の點にのみ重きを置いていたが、今の廂髪は、實用を無視して、美観に重きを置くようになった。」⁵と、簡素な束髪は一般には受け入れられなかったことがうかがえ、当初、推奨されていた束髪とは別の髪型である廂髪が生まれていた。衛生面を重視した簡易な髪型より、伝統を重視した日本髪風の髪型が審美性で勝っていたことがうかがえる。

これに関連して女性の髪の審美的側面に関しては、1907（明治 40）年の記事では、「日本の御婦人は、房房とした、漆のやうな黒い毛を賞美する」⁶、「日本人は、緑髪漆の如く丈にあまるを美としてあります」⁷と、長い黒髪を賞賛している。また、この黒髪を守るために、石鹼で洗うと髪が赤くなり、切毛やうねりが出やすくなるために麩海苔や饅頭粉、鶏卵で洗うことを推奨し、加えて、日本髪を結うことで、長い直毛の黒髪が保たれると説かれている。また「髪質」では、「色は漆の様に黒く、毛筋は極めて真直で、少しも癖のないのを美とする」⁸と記載されているように、婦人の髪質を黒く、かつ直毛であることを推奨する記事が取り上げられている。つまり、黒く長い髪が美しいとされ、これらを保つために日本髪が推奨され、日本髪を保つためには洗髪頻度を増すことは難しかったのではないだろうか。洗髪頻度が増さないことは、不衛生ではあるものの、黒髪を保つことのほうが重要視されていた。

「髪の装飾」では、女学生の中で束髪時に使用するリボンが登場している。「今の婦人は学校に通ふと、袴を穿いたり、或いは準西洋服というような服装をし、體操もし、島田の高髻では活発な運動ができないので、こ

4 『婦人世界』第6巻第6号1911（明治44）年 p.77

5 『婦人世界』第5巻第10号1910（明治43）年 p.2

6 『婦人世界』第2巻第5号1907（明治40）年 p.110

7 『婦人世界』第4巻第1号1909（明治42）年 p.97

8 『婦人世界』第2巻第5号1907（明治40）年 p.63

の場合には束髪にしなければなりません。」⁹と言われるように、若年層の髪型には日本髪ではなく、束髪が推奨され、かつ日本髪には用いないリボンなどの流行がみられる。西洋の近代的な女子教育の影響と、政府が掲げた富国強兵の政策により、母親となる女子の体格の矯正と体力の向上のため、学校で体育が取り入れられた。そのために、女子は着物ではなく、袴で登校するようになり、運動時に崩れても直すことのできる束髪が学校では採用され始めた（平松 2012）。このため、女生徒の間では束髪が推奨されていた。

「髪の手入」では、抜け毛やフケ、白髪や切毛に対する手入の方法が書かれており、衛生面での注意や、栄養摂取、髪油を要することなどが記載されている。なかでも、「洗髪」では、麩海苔や鰹鮓粉を使用することを勧める記事が多い。同様に、鶏卵を勧める記事も見受けられる。それぞれの使用方法についても、詳しく記載されている¹⁰。しかし、準備をするだけでも大いに時間がかかり、たくさんの油で固められた日本髪や廂髪を洗うには、十分な洗浄力はなかった。また、鶏卵は、決して安価でなく、容易に手に入るものではなかったことを考えると、一般的な方法ではなかったと推察できる。当時は、都市ガスもごく一部の地域のみに限られており、ようやくランプに代わって電灯が普及した頃であった。1914（大正3）年の記事では、「風呂は室内外で火を焚く。都会では水道が整備されつつある。」¹¹というインフラストラクチャーの状況では、風呂に入るだけならばまだしも、長い髪を洗うには、かなり不便であったと考えられる。そのためか、「日本人にして一日一回若しくは二日に一回位入浴しないものは殆んどありません。五日目で入浴せぬとか、一週間も入浴せぬとかいふ人は、よくよく湯嫌ひな人と云はれてゐます。」¹²と書かれており、入浴が

⁹ 『婦人世界』第5巻第10号1910（明治43）年 p.9

¹⁰ 『婦人世界』第2巻第5号1907（明治40）年 pp.64-65

麩海苔と鰹鮓粉を用いた洗髪方法：「麩海苔を煮て溶いた汁に鰹鮓粉を加えてどろどろにしたのを髪の毛へ十分に塗り込んでよくよく揉んで、それから温湯で洗ひ落すのでありますが、湯の温度の加減は人肌の温みよりは少し熱い加減がよしい。贅沢な向は、鶏卵で洗ひます、洗ひ方は卵を三つも四つも割つて黄身も白身も掻き混ぜ、それを髪の毛に塗り込んでよくよく揉んで、湯で洗ふこと、すべる麩海苔を用ゐる場合と変わったことはありません」

¹¹ 『婦人世界』第9巻第7号1914（大正3）年 p.47

¹² 『婦人世界』第9巻第5号1914（大正3）年 p.41

毎日の習慣となっていることがうかがえるにも関わらず、洗髪の頻度に関しては、「半年も髪を洗はないとか、一年も髪を洗はないとかいふひとがよくある」¹³と記載されている。また、推奨されている洗髪回数も「月に二回ぐらゐは髪を洗い」¹⁴と入浴回数とはかけ離れていた状態であったことがうかがえる。

当時、石鹼はすでに洗髪に利用されていたが、髪の本質に合わせた弱酸性のものや、石鹼のアルカリ性を補うようなリンスやコンディショナーのようなものはなかった。そのため、洗浄力があっても、髪が傷み、赤茶け、うねりが出てしまうことを恐れ、石鹼の使用が普及しなかったのではないかと思われる。洗浄剤の未開発もまた、髪の本質に影響していたと考えられる。ここに、自分では結ことの出来ない日本髪や廂髪を何日も保ち続けることも合わせ、衛生面を求める難しさがみられ、頻繁に洗うことのできない状況がうかがえる。

「髪に関わる職業」では、髪結の職業がどのようなものか、髪結になって夫を成功へ導く縁の下出世を伝える記事もある。また、「髪結は婦人の職業中最も有利のものとなりました。昔は随分下品なものでした。」¹⁵と言われるように、江戸期からの髪結の職業地位が変わってきていることが書かれている。女結髪師は、江戸時代後期に成立したものであり、それまで、女性でありながら自分の髪を自分で結えないというのは、女の恥とされていた（飯島 1986）。当初は、遊女を相手にしている同じ女髪結が一般の家庭にも行くため、流行は派手なほうへと動き、階級を重んじ、贅沢を禁じていた幕府は、醇風美俗に反する悪弊として、女髪結禁止の法を制定していた。しかし、再三の禁止にも関わらず、女髪結を職業とするものは存在し続けた。これらのことから、女髪結の初期は囚人の労働に位置づけられた時期があった（飯島 1986）。しかしながら、婦人雑誌は、利便性や衛生面、経済面よりも黒髪の本質を重視し、美しいと称えられる口絵を多く取り入れ、様々な日本髪を女髪結が推奨し続ける情報を発信し続けた。婦人雑誌は複雑な新作の日本髪や廂髪を掲載し、誌面のように結う

¹³ 『婦人世界』第7巻第12号1912（大正元）年 p.138

¹⁴ 『婦人世界』第6巻第6号1911（明治44）年 p.77

¹⁵ 『婦人世界』第5巻10号1910（明治43）年 p.2

ことのできる女髪結は婦人たちに必要とされ、重要な地位に押し上げられていったといっても過言ではないであろう。

上流階級を中心に一時的に流行した束髪は、庶民の女性に対して、洋装をすることもなく、和服のままでは、伝統として受け継がれていた日本髪が合っていたのであろう。また、鹿鳴館時代が終わった明治 20 年代には、極端な欧化政策に対する反動から、日本髪への振り戻しが起こっていたことも要因のひとつでもあった。そこには、日清、日露戦争を経て、富国強兵の強化とともに就学率が上昇した学校教育の中では、再生産を担う女子への運動促進による束髪と、具現化された良妻賢母を象徴する社会規範としてのみだしなみが、伝統を再構築し、長い黒髪で結う日本髪が良妻賢母を象徴するものとして重視された。簡易で清潔を保つことのできる束髪ではなく、不経済、不衛生な日本髪が続いたと推察される。

3. 第 2 期 大正期—女性の職業拡大と流行の変化（1916〈大正 5〉年から 1925〈大正 14〉年）

1914（大正 3）年から始まった第一次世界大戦は、戦場から離れた日本に戦争景気をもたらし、都市を背景にした大衆文化が成立した。経済の急速な発展は、購買力を持つ新中間層を生み出し、消費の大衆化が進んだ。伝統にとらわれないモダニズムの感覚を持った女性の風俗は、脚光を浴び、憧れのまなざしが向けられた（平松 2012）。大正期は、医師、看護婦、教師、電話交換手、タイピスト、女工、事務員、バスガールなど女性の職業は拡大し、社会進出と経済的自立が進んだ時期である。女性の職業が増加し、就職率が増加した背景には、明治後期に 90%を超える女子の義務教育就学率があり、初等教育だけではなく中等教育、さらに高等教育機関に進学する女性もいた。しかし、そこには同時に女性への再生産役割の押しつけも根強くあった。女子教育では良妻賢母論が強く打ち出され、良妻賢母の職分を教えることが女子教育の使命であり、強国への道であると説かれた。良妻賢母に教育は必要と考えられていたが、欧化主義的な教育や高度の知的教育は必ずしも歓迎されていなかった（渋川 1970）。そこでは、女性は家族に奉仕することが義務とされ、結婚すると同時に退職し、丈夫な子供を産み、今度は母親として教育的影響を与える存在となることが望

まれていた。そのために多くの女性は短い勤続年数で、男女の賃金を含む待遇の差別の中での就労であった（田崎 1990）。

『婦人世界』における頭髪に関する記事は、95本であった。テーマは、「髪型」に関する記事が62本、「頭髪の手入」35本、「髪装飾」13本、「美」7本、「髪質」9本、「頭髪に関わる職業」7本であった。この時期は第一期と比べ、「髪型」と「頭髪の手入」に関する記事が増加した。ただし、全体の記事数に大きな変化はなかった。

テーマごとにみていくと、「髪型」においては、廂髪に関する記事がなくなり、第一期になかった洋髪6本、ウェーブ10本、断髪1本の記事が登場した。1917（大正6）年には「近頃は若い方の間に束髪が流行します。殊に、女学校へおいでになる方は、大抵束髪にしていらつしやいます。」¹⁶と記載されており、束髪が若い女性の間で一般化されてきていたことがわかる。ただし、1919（大正8）年の記事では「正月から梅見頃にかけては、日本髪をお結ひになる方が多いやうでございます。丸髷は人の妻として権威ある、そして女性らしい善い髪型だと存じます。」¹⁷というように時期などによっては、やはり日本髪に結う機会もあることが記載されている。この記事からは、日常は束髪などの簡易な髪型であっても、ハレの日に日本髪にすること、また女学生や労働する女性は簡易な髪型であるのに対して、主婦は日本髪にするというように、伝統を体現する儀礼や旧来のジェンダー規範に従う主婦において、日本髪がふさわしい髪型として位置づけられるようになっている点が注目される。1922（大正11）年には、「昨年頃から日本髪の少なかったことは驚くほどではございます。藝者衆でもこの頃は、束髪や七分三分、耳隠し髪、髷なしなどを結ぶ人が大分多くなつて来ました。」¹⁸と、日本髪よりも洋髪の流行の兆しが記載されている。そして、1923（大正12）年に起こった関東大震災が髪型を大きく変えていく影響を及ぼし、「尤も今日は婦人の髪形や化粧も震災前のやうに、派手やかでは、却つて不眞面目に見えていい感じを與へません、どこまでもキリツとして活動的でその中に優しみのある風姿でなければなりません。」

¹⁶ 『婦人世界』第12巻第2巻1917（大正6）年 p.107

¹⁷ 『婦人世界』第14巻第2巻1919（大正8）年 p.108

¹⁸ 『婦人世界』第17巻第3号1922（大正11）年 p.141

と、震災後の復興期に相応しい束髪として紹介されている。

髪 of 審美的側面については、1920（大正 9）年に「日本人から見て美髪 of 標準とするところは、先づ房房と多く長く生え揃も、漆黒にして光澤があり、且適度にしなやかで、すらりと延びてゐなければなりません。美人 of のしるしの一つ」¹⁹と記載されているように、たびたび長く黒髪を美しいとする記事がでてゐる。洋髪が流行してきた頃にもまだ、黒髪に対する審美観は変化してはゐなかつた。

「頭髪の手入」について、髪油を塗ること、栄養面、精神面を整えることについては、第一期と大きな変化はない。ただし、「洗髪」については、洗髪間隔が庶民の中でも短くなり、「近頃は関西でも髪を洗ふことが盛んになつて、四十年も五十年も髪を洗つたことのない人までが、月に一度ぐらゐは必ず洗ふやうになりました。」²⁰と地方でも少しずつ習慣の変化が起こつてきてゐることが記載されている。1920（大正 9）年の記事では、「髪は週に一度、少くとも月に三度ぐらゐはよく洗つて」²¹と、今までの推奨してゐた洗髪間隔がより短くなつてゐた。洗髪剤については、麩海苔 15 本、餛飩粉 8 本と変わらずに使用され続けていることがうかがえる。ただし、石鹼 9 本、鶏卵 8 本、椿油の粕 9 本が続き、特に椿油の粕について、黒髪を艶やかに保たせるために推奨されている。ただし、麩海苔同様、簡易に使用できるものではなかつた²²。また、卵を使用する際には、少しでも頭皮に残ると異臭につながるため、十分なすすぎが必要とされた。洗髪頻度が増加した背景に、束髪 of の流行によつて洗髪し易い髪型になつてきたことと、女性 of の就職者数増加によつて日々 of の活動量が増加したことで、洗髪 of の必要性が出てきたことが関係してゐると考える。

「頭髪に関わる職業」について of の記事は、髪結に関するものが 4 本、美

¹⁹ 『婦人世界』第 15 卷第 4 号 1920（大正 9）年 p.31

²⁰ 『婦人世界』第 12 卷第 9 号 1914（大正 3）年 p.24

²¹ 『婦人世界』第 15 卷第 4 号 1920（大正 9）年 p.34

²² 『婦人世界』第 16 卷第 5 号 1921（大正 10）年 p.44 「椿の搾粕は今まで使用した中で最もよかつた。地の薄い布で作つた袋に椿粉を入れ、熱湯をかけながら箸で袋を突いて赤い汁を出し、それをもう一度地の厚い布で漉してから使ひます。かうしますと濯ぐ時に四五度できれいになります。一回 of の分量は椿粉茶飲茶碗に一杯、湯は洗面器に八分目ぐらゐで澤山です。冷めたらまた熱湯を注いで、何時も同じ程度を保つことが肝心です。」

髪師 1 本、美容術師 4 本であった。第二期には、髪結の記事が減少し、代わって美髪師、美容術師に関する記事が多くなる。職業婦人の月収を調査した記事では、美容術師であれば、開業するとかなり多額な収入を得ることが出来ることが記載されている^{23,24}。髪結に対する、世間の認識の変化を促した理由のひとつは、髪結が、一定の教育を受けた専門職とみなされるようになったためであろう（高橋 2005）。髪結養成のための最初の学校が設立されたのは、1913（大正 2）年に東京女子高等美髪学校であり、職業に就く前に学校教育を受けた（高橋 2005）。また、美髪学校、美容術学校の教員が、『婦人世界』の頭髪に関する記事を多く掲載し、どのように髪結、美髪師になるかを記載している。このように、髪結自身が、時代の流行を作り出し、自ら地位の確立へと動いたことは、女性の就職者数の増加と大きな関連があったのではないかと考える。

第 2 期は、経済の発展により、新中間層が出現し、増加していった時期である。その中でも、資本主義発展につれてさまざまな職業が女性に門戸を開き、職業婦人が増加した（村上 1983）。また、核家族化のなかで、「主婦」という役割が新たに誕生した。近代的労働である「家事」を担う「主婦」という位置づけによって課された「女性の抑圧」は、利便性のない長い黒髪を美しいという審美性を持ち続けることによって、外観から象徴しているかのようであった。しかし、束髪の流れによって、徐々に洗髪が容易となり、洗髪頻度は増し、人々の頭髪に対する清潔感は徐々に変化していった。

4. 第 3 期 昭和初期—個性美と伝統（1926〈大正 15〉年から 1933〈昭和 8〉年）

1923（大正 12）年に起こった関東大震災、昭和金融恐慌によって日本経済は弱体化したうえに、1929（昭和 4）年に世界恐慌の波にさらされた。1931（昭和 6）年の満州事変を契機に、日本軍は大陸へと進出し、国内はファシズムの傾向が強くなっていく。しかし、そのような政治的動きを感知しないかのように、モダンガールが女性の風俗として注目を浴び、映画

²³ 『婦人世界』第 20 巻第 1 号 1925（大正 14）年 p.124

²⁴ 『婦人世界』第 20 巻第 2 号 1925（大正 14）年 pp.46—47

の最盛期を迎え、ハリウッドの影響を強く受けるようになる(石田 2016)。欧米の影響を受けて、日本女性のファッションは「和」から「洋」へと変化していった。洋装の女性が増えると、断髪をする女性が現れた。彼女たちは、「身だしなみ」や「共同体主義的」な作りだされた伝統ではなく、「個性美」という自由な自己表現をおこなった。

明治期に下等職業と位置付けられていた女結髪師は、次第に時代を先取り、最先端を提供する技術者として大きな影響を与える存在になっていく。1913(大正 2)年に「美髪学校」が創設され、美容師教育が開始された。大正後期には美容院が設立され、髪結から美容師への転換がなされた。また、技術訓練のみではなく、学業として学んだ美容師は女性職業のあこがれの存在となっていく。1930(昭和 5)年からは美理容師は試験制度が発足し、免許制が開始され、社会的地位は格段に上昇していった(飯島 1986)。美容師の地位の変化は、頭髪の変遷に大きな影響を与えた一つの要因であったと言える。

『婦人世界』における頭髪に関する記事は、299本であった。テーマは、「髪型」に関する記事が232本、「頭髪の手入」67本、「髪装飾」10本、「美」16本、「髪質」13本、「頭髪に関わる職業」2本であった。第一期と第二期より、「髪型」の記事が4倍近く多くなり、それに伴い、「毛髪の手入」の記事も増加した。また、今までの長い黒髪を謳う記事からの変化が「美」についての変化も記事数を増加させた要因でもあった。

テーマごとにみていくと、「髪型」は、日本髪に関する記事が49本、束髪29本、洋髪171本、ウェーブ83本、断髪25本と、第二期と比較して、洋髪、ウェーブ、断髪に関する記事が圧倒的に多くなったことがわかる。廂髪に関する記事は第二期同様、全く見られなかった。それまでは縮れた毛は不美人とされていたし、断髪は身分の低いものが主としていたものであった(飯島 1986)。また、しかし、1926(大正 15)年、東京では洋髪42%、束髪27%、日本髪31%と伝統から離れ、西欧化していったことが分かる調査がある(飯島 1986)。1926(大正 15)年には、「髪に鍔を當てて日本人特有な、あいつやつやつした垂直の黒髪を、あたら洋人まがいの

赤ちやけたちぢれ髪にしてしまふが如きは、もう普通のこと」²⁵と、洋髪に批判的な記事が書かれていた。だが徐々に髪に鋺を当てるパーマネントが普及し、髪を赤く染める女性も現れた（飯島 1986）。1930（昭和 5）年に「洋髪が一般的になった」²⁶という記事があり、カールをかけた欧米風の洋髪は受け入れられていった。

1928（昭和 3）年には、まだ断髪が受け入れられておらず、教師が断髪したことによって生徒が真似をし、教職を失った事例²⁷や、夫に貞操を疑われた事例²⁸を紹介し、断髪と洋装が、社会だけではなく、家族からの嫌悪や反感が強く受けたことがわかる。1872（明治 5）年に女子に対して政府から断髪を禁止する布達が出されたころから時間が経過し、大きく経済成長していたころでも、モダンガールの象徴であった断髪は、にわかにな身に付けた習慣をひけらかす軽薄な姿として批判され、受け入れられるには時間を要することがうかがえる。このことから、第三期当初には、伝統的な美であった長い黒髪を短く切ることは、当時の女性に求められた良妻賢母とは逆行しているように映り、自立し、最先端に行く女性であり、伝統的な美を担わないことを強く批判されていたのである。人間の美は、それが何であるべきかを規定する目的概念とその対象の完全性とを前提していないと美的と判断されない附庸美が強く求められていた。この附庸美は、「意識内容の生産」ないし「対象的意味の構成」という積極的・能動的活動によって成立する（木幡 1986）。個性美と利便性の中で見出された断髪は、当時の社会が求めた良妻賢母を示す日本婦人らしさからかけ離れた髪型であり、すぐに受け入れられることはなかった。しかし、女性の就職がより積極的に展開されていくようになると、「断髪といへば、すぐにモダンガールを聯想なさるでせう？ 事実今まではさうでした。しかし近頃は、女性の生活が忙しくなり、又複雑になりましたせゐか、必要に迫られて断髪をしたといふ人が多くなり、従つて以前のやうに、異様な目で見られなくなりました。全く断髪は、いま世界各国を通じて、最も新しい、最も進

²⁵ 『婦人世界』第 21 巻第 7 号 1926（大正 15）年 pp.72-74

²⁶ 『婦人世界』第 27 巻第 12 号 1932（昭和 7）年 pp.456-457

²⁷ 『婦人世界』第 23 巻第 7 号 1928（昭和 3）年 p.325

²⁸ 『婦人世界』第 23 巻第 7 号 1928（昭和 3）年 p.326

歩したスタイルとされて居ります。」²⁹と受け入れを促す記事が登場するようになった。また、断髪は「毛髪に無理をさせたり、頭の地肌を蒸したりせず、洗髪もおつくうではなく、いつもさらさらして空気もよく通るから、衛生上はこの上ない」³⁰と、衛生面から称賛されている。これは断髪の合理性を肯定的にとらえると同時に、「さらさら」した髪の風合いにも触れることにより、髪に対する身体感覚の変化もうかがわせる記事である。

そして、日本髪を結い続けることは、髪結に行く時間、手入れの時間、髪洗にかかる時間など余裕がある人への贅沢なものとなり、1930(昭和5)年の記事では、「みどり滴たたる大丸髷は、日本婦人のみに許された特典です。働く必要のない、恵まれた夫人に、ぜひほしい姿。」³¹と、日本髪が一般的なものではなく、特権階級に許された髪型へと変化していった。

「頭髪の手入」の記事では、洋髪が流行し、ウェーブを熱した鍔でかけるようになると、今までになかった鍔による髪の傷み、切毛の手当てに関する記事が多くなっていった。これと同様に、「髪質」の記事でも、黒髪でなくとも、赤髪や縮れ毛をよしとする風潮もみられるようになった。1929(昭和4)年の記事では、「洋髪が流行りだしてからといふもの、お髪の縮れ毛を心配する人の少なかつた。中には、アイロンかける世話がなくて、生まれつき縮れ毛を却って喜ぶ方さへございます。」³²また、1931(昭和6)年の記事では、「ちぢれ毛とくせ毛といっても、現代はウェーブをかけるのですから、大した悩みはないやうなものです。」³³と、髪質に関する記事も大きく変化をしていった。洗髪に関する記事では、今までに使用されていた麩海苔に関する記事が9本、饅頭粉9本、鶏卵5本、椿油の粕2本がまだ使用されていた。しかし、「主にうどん粉とか、ふのり等の植物性のものですが、これらは何れも腐敗し易く、又頭の地肌に残った時には臭くなってしまうから、お湯で何度も洗はなければなりません。かういふ複雑なことをするのは、現代の人にはあまり向かないやうで

²⁹ 『婦人世界』第24巻第4号1929(昭和4)年 p.106

³⁰ 『婦人世界』第23巻第4号1928(昭和3)年 p.54

³¹ 『婦人世界』第25巻第3号1930(昭和5)年 p.189

³² 『婦人世界』第26巻第5号1931(昭和6)年 p.130

³³ 『婦人世界』第24巻第6号1929(昭和4)年 p.205

す。」³⁴と、今迄の洗髪方法が現状の生活にあわなくなってきたことを伝えている。加えて、第一期にはなく、第二期にはわずか2本であったシャンプーの記事が9本掲載された。「シャンプーは週に一度位なさいますと毛髪も艶やかになりますし、毛も丈夫になります。」³⁵と、粗悪な石鹼に代わってシャンプーが登場し、髪洗が容易になり、洗髪間隔はますます短くなっていった³⁶。

化粧をはじめ、洋装、洋髪に大きな影響を与えたハリウッド映画の流行を踏まえ、雑誌でもどのように真似るかを記事にしたものが多かった。特に、洋髪になってからは、自分で結えるようになり、今までの女髪結にしてもらわないと出来ないような髪型ではなくなった。近代的職業は、自己の意思で就くこと、自由意志による転業や廃業、公私の明確な区別があることが基本的な条件であった(村上 1983)。以前からあった農業、製糸、紡績、織物に従事した女性の職場は、これらのことが通用する世界ではなかった。近代的職業に就く職業婦人の増加は、生活を多様化させ、さまざまな扱いやすい髪型を必要とし、読者の生活様式の変化が、髪型の記事数の大幅な増加へと反映させたのではないかと考えられる。髪型の増加に伴い、新たな手入れの方法や審美的観点の変化がさらに記事数を増加させた要因でもあったのではないか。また、頻繁に洗うことによって起こると恐れられていた赤毛、縮れ毛が徐々に受け入れられるようになり、黒髪で直毛である必要性も絶対ではなくなった。加えて、シャンプーの登場と震災後のインフラストラクチャーの整備によって、洗髪が容易になり、洗髪後に自分で結うことが出来るようになったことは、洗髪に対する抵抗が減少し、頭髪の清潔習慣が日常に根付きだしたきっかけとなったものと思われる。

³⁴ 『婦人世界』第24巻第6号1929(昭和4)年 p.192

³⁵ 『婦人世界』第27巻第10号1932(昭和7)年 pp.301-302

³⁶ 『婦人世界』第24巻第6号1929(昭和4)年 pp.192-193、シャンプーパウダーを用いた洗髪:「シャンプーパウダーを、大匙二杯ほど水にとき、それで三四分間洗ひ、あとをお湯で濯ぎさへすればよいのです。お湯といつても、三升か四升あれば十分です。」

IV. 結論

明治後期に発刊された『婦人世界』に掲載された頭髪に関する記事の内容を検証し、明治後期から昭和初期にかけて大衆に向けたマスメディアが頭髪をどのように報じ、変遷していったのかを検証し、考察した。

明治後期に発行された『婦人世界』は、多くの中産階級の若い女性を読者の対象とし、明治期から昭和初期にわたって時代と共に変化する人々の生活に対して、実用記事を提供し続けた、貴重な情報源であった。

明治後期の婦人のあいだでは、女性が担う日本の伝統が髪型にも強調され、長く艶やかな黒髪で結う日本髪を維持することが推奨されていた。日本髪を結うことは、伝統的な日本女性の美を担うだけでなく、主婦にとっては良妻賢母を象徴する社会規範であり、日本女性らしさを強調するものであった。しかし、西洋の近代的な女子教育の影響と、政府が掲げた富国強兵の政策により、母親となる女子の体格の矯正と体力の向上のため、学校で体育が取り入れ、これらは、髪型の流行にも影響し、女生徒の間では束髪が流行した。若い女性には、再生産できる丈夫な身体を求める一方、婦人には日本の伝統を背負い、良妻賢母としての役割を担うよう推奨される矛盾した状態が内面化されていたことが推察される。

大正期に入ると、女生徒時代に束髪を結っていた女性の間では、修了後にも束髪が定着し始めていた。また、資本主義発展によって女性が就くことのできる職業数が増加し、それらへの就業率の増加とともに職業婦人の間では簡潔な手入れでよい洋髪が増え始め、日本髪は正月などの特別な行事のときに結う髪型になっていた。加えて、関東大震災後には、婦人にも動きやすく簡便で質素な束髪や洋髪が推奨された。その背景には、第一次世界大戦によって戦争景気を日本にもたらし、経済は急速に発展していき、女性の職業は拡大し、経済的自立が進んだことによって、活動量が大幅に変化したことが影響していると推察される。活動量の変化によって、髪型は変化し、インフラストラクチャーの整備が進んだことを合わせ、髪に対する清潔習慣も少しずつ変化した。

大正後期から昭和初期には日本髪は、活動量の少ない特権階級にのみ許

された髪型となり、庶民には洋髪が流行した。また、以前は不美人、不良少女、娼婦の髪型として見下されていた断髪をする女性が登場してくる。記事の中でも洗髪し易く衛生的であると推奨されるようになった。洗いすぎると赤茶け、うねりが出ると控えられていた洗髪も、ウエーブが流行したことによって、受け入れられるようになってきていた。加えて、石鹼の改良、シャンプーの登場、インフラストラクチャーの整備が進んだことにより、洗髪がさらに容易になり、髪に対する清潔習慣は大きく変化していった。長い黒髪を守るために、麩海苔を煮こんで半日かけて髪を洗うことに時間を割く必要がなくなったことは、大きな変化であった。

この時代に生じた女性の髪型と、それにまつわる審美観や洗髪習慣の変化は、就労し、かつ家庭労働も担うことを必要とされた当時の女性にとって、必然的なものであっただろう。一方で近代国家日本の「伝統」を担うものとして位置づけられた黒髪の審美性が、特定の社会階層や儀礼のなかに保持されたことにも留意しておく必要がある。女性の髪型は、女性の地位・役割の変化や都市インフラの整備だけでなく、「富国強兵」と「伝統」の護持という、それぞれ異なるベクトルをもつ要因にも影響を受けつつ変化していったのである。

今回検討した記事の多くが、流行を作り出した女髪結、美髪師、美容学校の教員によって記載され、従って本稿は情報を発信する機能をもった雑誌側の変遷を追ったことになる。そのため、今後は、読者はどのように髪を扱い、いかなる価値観を持っていたのかを検討することを課題としたい。

引用文献

- 平松隆円, 2012, 『黒髪と美女の日本史』水曜社.
- 飯島伸子, 1986, 『髪の世界史』日本評論社.
- 石田あゆ, 2001, 「大正期婦人雑誌における女性・消費イメージの変遷: 『婦人世界』を中心に」, 京都社会学年報, 9, 55-74.
- 木幡順三, 1986, 『美意識論 付・作品の解釈』東京大学出版会.
- 木村涼子, 2010, 『<主婦>の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
- 村上信彦, 1983, 『大正期の職業婦人』ドメス出版.

- 大原梨恵子, 1988, 『黒髪 of 文化史』 築地書館.
- 渋川久子, 1970, 『近代日本女性史①教育』 鹿島研究所出版会.
- 鈴木正幸, 2010, 『化粧とあぶら』, *Biostory*, 14, 46-51.
- 高橋康雄, 1999, 『断髪する女たちーモダンガールの風景』 教育出版.
- 高階秀爾, 2015, 『(美の季想) 春の黒髪 想像かきたてる魅力の源』, 5 面, 朝日新聞.
- 田崎宣義, 1990, 「女性労働の諸類型」, 女性史総合研究会編, 『日本女性生活史 4 近代』 財団法人東京大学出版会.
- 山崎康夫, 1959, 『日本雑誌物語』, アジア出版社.
- 横山友子, 2016, 「黒髪と清潔 : 明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷」 人間社会学研究集録, 11, 101-124.

Historical change in hair cleanliness in Japan—an analysis of magazine articles in “Fujin sekai” from 1906 to 1933

YOKOYAMA Tomoko

This study investigates the contents of articles with “hair” in the title in “Fujin sekai,” a magazine published from 1906 to 1933. Extracted articles were categorized. Each 10-year category was analyzed.

In the first decade, Japanese women washed their hair with Funori, Udon-ko, or vitellus because these materials were believed to make their hair black, long, straight, and glossy. It was natural for women to have the traditional Japanese hairstyle at that time in Japan. However, their hair was hardened with rosin or wax and could only be washed once or twice a month. In the middle decade, with the social advancement of women requiring easy movement, a simple hairstyle began to spread. In the last decade, brown, short, and wavy hair, among other styles, became widely accepted, and the articles started recommending washing hair with soap more than once a week.

The hair was not just clean; it was supposed what the state that contradicted it that was made to carry the way of the female inside as the aesthetic object which beautiful black hair and a Japanese tradition. However, domestic production of soap began, infrastructure was improved, elementary education spread, literacy rate increased, and the economy developed with women having jobs, and all this changed the standard of female beauty from the traditional style to individual preference. The shampoo custom changed with it, and cleanliness became entrenched.